

英国のコミュニティガーデンとシティファームにみる地域住民活動 瀬沼 頼子（昭和女大短大）

〈目的〉 近年、英国の都市部で盛んになってきているコミュニティガーデン（以下 CG）とシティファーム（以下 CF）における地域住民の活動実態を明らかにし、そこから日本のまちづくりへの導入可能な点を模索し、今後の都市部での地域住民による新たなコミュニティ形成の方向と課題を明らかにすることが、本研究の目的である。

〈方法〉 1999年9月にロンドン、バーミンガムにおいて、先例と言えるCGとCFを視察調査し、その活動の歴史、現在の活動状況、代表者に対するヒヤリング調査等を行った。この視察調査の結果を整理分析し、上記目的を明らかにすべく考察を行った。

〈結果〉 CGとCFは、英国の都市部に顕在化する種々の社会問題解決策の一つとして、都市空間内に農的空間を創生することにより、新たなコミュニティ形成の試みのコアとして注目される。CGは、'99年には英国内に約500存在し、その意義と公益性は、初のCG全国会議('98)で定義されている。CGとCF共に、都市の中の農的空間、地域住民の農業体験の場であり、特に荒廃した地域再生をはかる上では、重要な役割を果たしてきた歴史がある。英国では、ほとんどが住宅地の近くにあり、公園的機能や環境学習・実践の場としての機能を果たし、地域住民の主体的・協同的な取り組みにより、新たなコミュニティを形成してきた実績がある。日本の既存の市民農園は限られた住民のものであり、英国にみるCGやCFのような考え方・手法を取り入れ、都市での新たな農的空間を形成していくことが、今日的な社会問題に対する一つの方向となることが期待できる。そのためには、積極的な住民活動の育成と共に自治体の理解と協力が必要であり、今後の都市空間の整備のあり方についても十分検討していく必要がある。